

③発 題：「死をめぐる～自殺予防を中心に～」

講 師：高野嘉雄氏（弁護士・前日本弁護士連合会副会長）、藤掛永良氏（臨床心理士・前奈良大学教授）、阪中順子氏（臨床心理士・中学校教諭）

④分科会：テーマ「自殺に関するスーパービジョンのあり方」

分科会	担当センター	分科会	担当センター
第1分科会	横浜・北海道	第4分科会	東京・香川
第2分科会	仙台・川崎	第5分科会	大分・京都
第3分科会	千葉・広島		

3. 自殺防止相談窓口の普及・啓発事業

(1) フリーダイヤルの実施

①受信体制

期間：2007年9月～2008年3月（毎月10日8：00～翌日8：00）

フリーダイヤル電話番号：0120-738-556

参加センター：48センター・50箇所（2分室含む）24時間参加：37センター

電話台数：50台 相談員延べ人数：4,173人

②受信件数 総受信件数：17,154件（男10,301件・女6,853件）

内自殺志向件数：5,753件（男3,005件・女2,748件）

2006年度・2007年度の実施日数は、いずれも同じ7日であるが、月1日実施の07年度は、受信総件数・自殺志向件数のいずれにおいても増加している。自殺志向の比率も33.5%を占め、06年度より3%高まった。

「雪国の閉ざされた田舎で一人住まい。毎月のフリーダイヤルがいのち綱になっている」老人、「親の離婚により捨てられ、何のために生まれてきたのか」と訴える少年、「薬漬けで治る見込みがなくて、明日への希望がまったくもてない」中年男性などケースは限らないが、毎月継続して「自殺予防いのちの電話」としてフリーダイヤルを受けることの意義は、計り知れないものがあると思われる。

(2) 公開講座の実施

全国のいのちの電話センターが、各地域で一般市民を対象とし、自殺予防・防止のための啓発事業として公開講座を実施した。40センターで実施し、延べ7,622名の市民が参加した。

(3) 自殺防止の広報・啓発活動

フリーダイヤル開始日を9月10日（世界自殺予防デー）としたため、この前後では、新聞・テレビ等のニュースを通じて広報活動が活発におこなわれた。これ以外の広報媒体としては、ポスター・チラシ・カード・インターネット・ラジオなどが活用され、毎月概ねコンスタントに受信することができた。特にポスターについては、各都道府県・政令指定都市の行政機関、JR・私鉄関係から例年を越える枚数の受注を受け、また各地方の行政機関紙のフリーダイヤル広報の掲載件数も増加した。

4. その他自殺防止のために必要な事業

フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」毎月10日実施の初年度でもあり、各種会議を開き、全国いのちの電話からの情報集約と分析などをおこなって、「自殺予防」としてのネットワーク構築をすすめた。

実施時期：6月1日（東京）・6月30日（福岡）・8月10・11日（奈良）・9月14・15日（東京）・3月7日（京都）そのほか適時開催した

5. 全国いのちの電話 フリーダイヤル受信体制一覧表

(2007年9月～2008年3月 毎月10日8時～翌日8時)

No	センター名	台数	2007年度			2006年度		備考
			受信時間帯	総受信時間	24時間 実施センター	総受信時間	24時間 実施センター	
1	旭川いのちの電話	1		168.0	○	99.0		
2	北海道いのちの電話	1		168.0	○	118.0		
3	あおもりいのちの電話	1	12:00～21:00	78.0		78.0		2007年度 土曜日(11月)24時間
4	秋田いのちの電話	1		168.0	◎	84.0		
5	盛岡いのちの電話	1	12:00～21:00	63.0		63.0		
6	仙台いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
7	山形いのちの電話	1	8:00～24:00～5:00	147.0		147.0		
8	福島いのちの電話	1		168.0	◎	96.0		
9	新潟いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
10	長野いのちの電話	1	11:00～22:00	77.0		77.0		
	長野いのちの電話松本	1	11:00～22:00	77.0		22.0		
11	群馬いのちの電話	1		168.0	◎	99.0		
12	栃木いのちの電話	1		168.0	◎	118.0		
13	足利いのちの電話	1		168.0	◎	66.0		
14	茨城いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
	茨城いのちの電話水戸	1	13:00～20:00	49.0		49.0		
15	埼玉いのちの電話	1		168.0	○	103.5		
16	千葉いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
17	東京いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
18	東京多摩いのちの電話	1		168.0	◎	120.0		
20	川崎いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
21	横浜いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
22	山梨いのちの電話	1	13:00～24:00	77.0		90.0		
23	静岡いのちの電話	1	15:00～23:00	56.0		60.0		
24	浜松いのちの電話	1	10:00～24:00	98.0		108.0		
25	岐阜いのちの電話	1		168.0	◎	48.0		
26	名古屋いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
27	三重いのちの電話	1	15:00～23:00	56.0		54.0		
28	京都いのちの電話	1		168.0	○	192.0	○	2006年度滋賀含む
29	奈良いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
30	関西いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
31	神戸いのちの電話	1		168.0	◎	168.0	◎	
32	はりまいのちの電話	1		168.0	◎	75.0		
33	和歌山のちの電話	1		168.0	◎	96.0		
34	鳥取いのちの電話	1		168.0	◎	132.0		
35	島根いのちの電話	1		168.0	◎	168.0	◎	
36	岡山いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
37	広島いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
38	徳島いのちの電話	1	9:30～24:00	101.5		101.5		
39	香川いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
40	愛媛いのちの電話	1		168.0	◎	120.0		
41	高知いのちの電話	1	9:00～21:00	84.0		84.0		
42	北九州いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
43	福岡いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
44	佐賀いのちの電話	1		168.0	○	123.0		
45	長崎いのちの電話	1		168.0	◎	102.0		
46	熊本いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
47	大分いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
48	鹿児島いのちの電話	1		168.0	○	168.0	○	
49	沖縄いのちの電話	1	8:00～23:00	105.0		105.0		
(19次番)	全国合計	50		7,284.5	37	6,190.0	21	

◎印はFD日のみ24時間受信したセンター

事業内容報告

I. 自殺防止ネットワーク構築事業

日本自殺予防シンポジウム（第32回：福岡）

日 時：2007年6月30日（土）12時30分～16時15分

場 所：ももちパレス（福岡市早良区百道2-3-15 福岡県勤労青少年文化センター）

テーマ：「ひろげよう支えあう絆～生きる力を信じて～」

参加者：504名

主 催：社会福祉法人いのちの電話

共 催：社会福祉法人福岡いのちの電話、日本いのちの電話連盟、日本自殺予防学会

<大会趣旨>

日本自殺予防シンポジウムを開催するにあたり、参加者それぞれの立場で知恵と力を結集し、課題解決に向けての活動に取り組むことができるよう、更に、地域での自殺予防のためのネットワーク構築に向けて動き出す機会になればと願う。

<準備について>

福岡いのちの電話では組織を挙げて取り組むべく、法人理事会を核に県・市医師会、県・市精神保健福祉センター、市保健医療部、産業保健推進センター、リメンバー福岡自死遺族の集い等の自殺防止活動に係る行政・関係団体に呼びかけその代表者との17名で実行委員会を構成した。

実行委員会を4回開催し、テーマ、内容の企画、広報、分科会形式について熱心に討議した。

<基調講演>

テーマ「あなたの笑顔 なによりクスリ」昇 幹夫氏（日本笑い学会副会長・産婦人科医）

講師の昇幹夫氏は産婦人科診療をしながら「日本笑い学会」の副会長として笑いの医学的効用を説いておられる。「笑い」は今や科学であり学問である。吉本新喜劇を見て大笑いするとリンパ球がガン細胞をやっつけてくれる等実験に基づいたお話は興味深く、また、ガン患者とともにモンブラン山麓トレッキングツアーに参加、その参加者が人との出会いをきっかけに生き生きと若返る様がスライドとともに語られた。自分に起こる様々なこと、それは受けとり方次第で生きやすくも生きにくくもなる。「笑うこと、泣くこと」「人に話を聴いてもらうこと」「お華粧すること（注：この漢字を使用）」「楽しく歌うこと」は元気になる秘訣。終始、会場を笑いの渦に巻き込んだ。

<分科会>

①「高齢者のうつへの気づきと対応」（参加者152名）

〔コーディネーター〕 下野正健氏 福岡県精神保健福祉センター所長

〔話題提供者〕 村田 浩氏 大牟田保養院院長

吉原郁子氏 粕屋町介護支援課地域包括支援センター保健師

熊谷紀子氏 福岡プライマリケア訪問看護ステーション看護師

わが国の自殺者数の3分の1強が60歳以上であり、その原因の一つとして、うつ等の精神的疾患があげられる。村田氏は精神科医の視点から高齢者のうつ病・うつ状態との関連、身体症状、精神症状、早期発見、早期治療の重要性を話され、吉原氏は高齢者の居場所づくりなど地域での二次予防の取り組みの様子を、熊谷氏は訪問看護師としての立場から高齢者の思いとそれを取り

まく住宅の環境、家族の関わりについて話された。うつの高齢者へのコミュニケーションのとり方などの質疑応答が行われ、終わりにコーディネーターからうつや自殺予防の対策はやっと始まったばかりで、「新しい街づくり」という概念ですすめることが良いのではないかと。医療機関、包括支援センター、訪問看護ステーション、地域の皆さんそれぞれの手で高齢者に楽しい街づくりをしていくんだという気持ちで展開していくことが大切との発言があった。

②「職場におけるいじめ」(参加者52名)

〔コーディネーター〕 織田 進氏 福岡産業保健推進センター所長

〔話題提供者〕 田中 里香氏 スタジオリカクリニック院長 精神科医

峰松 修氏 九州産業大学教授

〔追加発言〕 渡辺 岑氏 福岡中央産業保健センターコーディネーター

平成18年の心の病での労災認定の4割が30歳代であり、若い労働者のストレスの原因として職場のいじめに注目する必要がある。精神科医の田中氏は事例を交えながら「職場のいじめ」は流動性の少ない固定化した組織ほどおこりやすく、組織に与える影響は大きく、能率や推進力の低下を引き起こし深刻化すると発言。峰松氏は解決策として総合的な対応作戦本部の設置など10項目を提示。また、傍観者の態度が鍵になること、職場の場合は健康管理室がその役目を担うことが確認された。最後にコーディネーターより職場のいじめに対する取り組みは、いまだその定義も明確でなく、相談窓口の設置や法の整備が必要な時期にきているとの発言があった。

③「子どもの“いのち”を支えるために」(参加者71名)

〔コーディネーター〕 林 幹男氏 福岡大学教授 福岡いのちの電話理事長

〔話題提供者〕 西村 修氏 スクールカウンセラー

山口 祐二氏 チャイルドライン@ふくおか事務局長

“いじめ自殺”から考えられることとして、今日の子供達は見かけに反して、不安全感や無力感、孤独感などに傷つき苦しんでいると思われる。よって、何らかの負の要因が一気に自殺行動へと駆り立てる危険性を背負っていると感じる。子供達の生き生きとした日常を保障できる大人の役割についてともに考えたいとコーディネーターからの投げかけがあった。山口氏は「チャイルドライン」の活動を通して、今の子供達は失敗や傷つくのを恐れ、人と違うこととか仲間からはずされることを不安がっている。子供たちが必要と感じるのは居場所、味方、仲間、支えである。また、スクールカウンセラーの西村氏は普通を装っている子供たちに追い込まれているというサインを出せる、弱音を吐ける、愚痴を言える人が周りにいることが大切であり、スクールカウンセラーの仕事は悩みを取り除くことではなく、どれだけちゃんと悩ませてあげられるかではないかと話された。子供への対応について等の質疑応答があった後、コーディネーターは、今、子供達に求められていることは“普通”の仮面をはずした本音(不満、不安、弱音)に耳を傾け、現実を生きている先輩として当たり前のことを素朴に語ってくれる大人の存在かもしれないと結んだ。

④「企業破綻、多重債務の苦しみと自殺」(参加者53名)

〔コーディネーター〕 吉野 正氏 法テラス福岡所長 弁護士

〔話題提供者〕 樺島 敏雅氏 福岡南法律事務所 弁護士

内村 英幸氏 福岡心身クリニック 精神科医

経済的苦しみにはクレジット・サラ金からの多重債務者と中小企業の経営破綻による経営者家族の苦しみ2種類がある。両者とも経済的苦境による自殺をしばしば引き起こす。このことを

客観的にいろんな角度から考えていきたいとコーディネーターからの投げかけがあった。

まず弁護士の樺島氏より多重債務による自殺者の状況、グレーゾーン等の金利について話された。また、精神科医の内村氏からはうつ病になりやすい性格や過労自殺の90%以上がうつ病でそのほとんどが精神科を受診していないこと、ギャンブル依存症、買い物依存症等は自己責任の自覚による解決などの発言があった。最後に多重債務の対策として法的な解決方法として自己破産、個人再生、弁護士の任意整理、特定調停についての解説がなされた。

⑤身近な死（参加者57名）

〔コーディネーター〕 西浦 研志氏 福岡市精神保健福祉センター所長
〔話題提供者〕 下窄 垂美氏 長崎こども・女性障害者支援センター精神保健福祉係長
森川 友子氏 九州産業大学国際文化学部講師
一般市民 自死遺族

「身近な死」について！災害にみまわれたとき”犯罪被害にみまわれたとき”自死遺族の3つの立場からの話題提供があった。長崎こども・女性障害者支援センター下窄氏は地域精神保健の応急サービス・チームCRTの活動について、森川氏は犯罪被害者の心理について話された。自死遺族の方からは、遺体を発見したときのフラッシュバックによる苦しみ、周囲の無責任な言葉による傷つきによりうつになったこと。主治医の励ましや、うつの仲間のおかげで今は生きてよかったと思えるが、ここまでの道のりは絶望的で暗い暗いトンネルを漂い続けている感じだった。うつ病で家族を亡くされた方は「自分を責めないでほしい」「病気がそうさせたのだから」との訴えは説得力のあるものだった。参加者の自死遺族の方からの発言もあった。

⑥インターネットによる自殺予防の可能性（参加者33名）

〔コーディネーター〕 松尾 公孝氏 臨床心理士 福岡いのちの電話教育委員長
〔話題提供者〕 田村 毅氏 東京学芸大学教授・精神科医師 東京いのちの電話理事

田村氏より東京いのちの電話で試験的に実施されているメール相談について、試験運用の状況説明があった。ネット相談の国内外の先行事例や導入に消極的な意見が多かった準備段階でのこと、相談員研修について、また、ネット相談と電話相談の違いなどが話された後、試行の様子が語られた。平均3日以内に返信し、月に130通返信できるようになったとのこと。自殺志向は30%と高い。

結論として、開始してみて、想定していたようなトラブルは起こらなかった。

質疑応答の中でネット上で苦しさに関心し生きる方向に持っていくことができるシステムは是非必要であるとの発言があった。

〈アンケートの実施〉（回収114）

アンケートについては時間延長のため記入時間が確保できなかった分科会もあり、回収率は23%と低かったが、回答は基調講演については95%以上、分科会も70%以上が「良かった」との感想が寄せられており、概ね好評だった。また、各分科会ごとの具体的な感想は大変参考になった。

今後のテーマ等に関する要望として、小グループ、ディスカッションを取り入れて欲しい。再度、同じテーマでやって欲しい。メンタルケアを担う人材養成について今後どうなるか取り上げて欲しい。夫婦、家族のテーマでやって欲しい。自殺防止について県、市町村、医師会の取り組みに焦点を当てて欲しい等々が書かれていた。